



第4回〈通算第20回〉定時社員総会

常務理事（執筆時） 玖野 峰也 / *MINEYA KUNO*

第4回(通算第20回)定時社員総会が2016年5月31日にホテルJALシティ田町の地階「鳳凰」の間で開催されました。正会員数604名の内380名(当日出席50名、表決委任330名)の出席を得て、池田駿介専務理事の司会で開会されました。定款の規定に依り小宮山宏会長が議長を務め3件の議案を審議し、2015年度事業報告と収支決算ならびに役員(理事と監事)の選任を原案通り決議しました。また2016年度の事業計画ならびに収支予算につ



いては既に2016年2月18日の理事会で決定されており、社員総会において報告され承認されました。

社員総会に引き続いて各委員会とプロジェクトから7件の報告がありました。安全知と安全学委員会では吉村健志幹事から、第11回安全工学フォーラムの開催状況が報告されました。根本的エンジニアリングの普及啓発プロジェクトは鈴木浩リーダーから、メタエンジニアリングを使った6年間の活動とEAJ主催/共催講演会が報告されました。電力流通システムプロジェクトは白田誠次郎リーダーから、電力自由化と電力流通設備の課題が英独の事例も含めて報告されました。原子力事故からの再生プロジェクトは山脇道夫リーダーから、福島原発事故の総括と原子力規制のあり方について報告書と談話サロンの様子が報告されました。バイオマス・アジアプロジェクトは西嶋昭生リーダーから、インドネシアでのバイオマス調査の結果が報告されました。自然エネルギーのガバナンスプロジェクトは大久保泰邦リーダーから、日本学術会議における分散型再生可能エネルギーのガバナンス小委員会との連携が報告されました。国際活動の各実行委員会(CAETS、EA-RTM、JAFOE、ERLEP、STS forum YELS)



と新設される新コアプロジェクト(材料、基盤工学、バイオ・医療、ロボット・AI、コミュニケーション科学)の有機的展開について、長井寿常務理事・統括リーダーから戦略的報告がありました。

今年の総会では初めて会員の特別表彰が行われました。EAJの普及啓発活動をはじめとして組織運営に多大な貢献をされた神山新一顧問と白鳥正樹会員選考委員のお二人が栄誉を受けられました。

新役員の選任に伴い、新理事が初回の理事会を開催し、会長に阿部博之理事、上級副会長に小泉英明理事、副会長に中西友子・宮城光信・谷口功・松本洋一郎各理事、専務理事に池田駿介理事、常務理事に長井寿・田中秀雄両理事を選任し、小宮山宏前会長を名誉会長に、梶山千里前副会長を顧問に委嘱することを決定した旨が総会場で報告されました。

恒例の特別講演会は、東京大学特任准教授の松尾豊氏を講師に開催されました。大変興味深いテーマでありかつ若手の講演者を迎え、企業の技術者が多く聴講いたしました。そして締め括りに会場を1階の「ブラセリー・ガーデニア・ピシーズ」に移し50名の参加を得て懇親会が開催されました。冒頭、熊本地震の被災者にお見舞いの思いを告げ、小宮山宏名誉会長と阿部博之会長のご挨拶をお聞きして、会員の決意と会話が大いに進みました。



特別表彰を受けられた白鳥正樹会員選考委員（左）、
神山新一顧問（中央）と、小宮山宏会長

特別講演「人工知能の未来—ディープラーニングの先にあるもの」



松尾 豊氏

講師：松尾 豊氏

所属：東京大学グローバル消費インテリジェンス寄付講座
共同代表・特任准教授

折しも韓国のプロ棋士が、人工知能「アルファ碁」に敗れる事件があり、大変ホットな話題になりました。人工知能は3回のブームがありました。第一次は1956年から1960年代で「考えるのが早い人工知能」です。第二次は1980年代で「ものしりな人工知能」です。現在の第三次は2013年以降で「データから学習する人工知能」です。これまでと大きく異なるのはディープラーニングであり、これは「認識（特に

画像認識）」から「運動の習熟」そして「言語の意味理解」に至る革命的な手法です。

これまでの人工知能では、対象の特徴を抽出するのに人間の観察と設計が必要でした。したがっていくら知識を書いても例外に対応できませんでした。記号とそれを指すものが接続していないので、記号を操作できませんでした。ディープラーニングでは、データをもとに、どこに注目すべきかという「特徴量」が自動的に獲得されます。このディープラーニングと強化学習の能力の進展は目覚ましく、松尾講師の予測が10年以上も前倒しで実現されているとのことです。既に言語の意味理解が実現しています。

応用分野は特に農業、建設、食品加工、組み立て加工などですが、松尾講師は特に掃除と調理に注目しているそうです。

世界的な競争が激しいのですが、情報路線（おとなの人工知能）と運動路線（こどもの人工知能）のパスの中で、日本は後者の路線が適しているのではないかとこのコメントで講演が締め括られました。その後は懇親会でも尽きせぬ議論が続きました。

なお2015年度活動報告・収支決算、2016年度事業計画・収支予算と役員名簿は『活動報告2015/2016』に掲載し発行いたします。

この度、はからずも会長を拝命することになりました。小宮山会長の就任時から見て大幅に高齢化したことは決して好ましいことではありませんが、お引き受けした以上は精一杯努力する所存ですので、よろしくお願いいたします。

まずは日本工学アカデミーの歴史をつくってこられた歴代会長をはじめとする諸先輩のご見識とご尽力に心から敬意を表します。新会長として、これらの重みを大切にしていきたいと考えます。

さて工学系アカデミーの特色の一つは、産業界からの会員が学術界とともに大きい割合を占めていることです。しかしながら日本工学アカデミー（EAJ）の現状は、大学が57%、企業が18%です（2016年4月1日現在）。因みに全米工学アカデミー（NAE）でも企業会員の増強には苦心をしているようですが、EAJに比較すれば、構成率をはるかに大きいといえます。一方EAJの女性会員はようやく4%を越えました。さらに高い目標に向かって進まなければなりません。

もちろんEAJは、これまで会員の増強についてさまざまな努力をしてきましたが、前述の状況をも踏まえ、さらなる増強に向けて皆様のお知恵をいただきたくお願いいたします。

「科学技術の状況に係る総合的意識調査」（文部科学省 NISTEP 定点調査 2015）報告書が、さる2016年3月31日に刊行されました。大学、公的研究機関、企業などによる定点調査です。

第4期科学技術基本計画期間中（2011～15年度）に、課題達成に向けた取り組みには一定の進展が見られましたが、一方大学や公的研究機関における研究活動の基盤への危機感が増していることが改めて明らかになりました。このような危機的な状況は、論文数などにおける日本の地位の相対的な低下として定量的にも裏付けられています。その要因として、たとえば、若手教員・研究者が長期的な展望を持って独立して研究に打ち込める環境整備が遅れていることが挙げられています。また厳しい財政状況の中、公的投資の成果が問われるのは当然ですが、短期的な成果が求められる傾向が過度になっているとの指摘です。将来ノーベル賞につながるような独創的な研究成果が減少することが懸念されています。

以上是指摘事項の一部に過ぎませんが、為政者をはじめとする関係各位にご理解をいただかなければならない一連の深刻な調査結果であり、EAJとしても看過すべきでないと考えます。まずは話題にさせていただきたくお願いいたします。

小宮山会長は、任期1年目で東日本大震災に遭遇し、最後の年に熊本県を中心とする深刻な地震災害に見舞われました。その3期6年間、様々な課題に対してリーダーシップを発揮され、成果を挙げてこられました。心から敬意を表し、また引き続きのご指導をお願いし、私の会長就任のご挨拶といたします。



本年の総会をもって、6年間務めた会長職を辞すことになりました。今後も名誉会長として阿部博之新会長をお支えし、工学アカデミーの発展に微力を尽くし続ける所存です。この機に臨み、これまで御協力いただいた御礼もかねて、会員の皆様に一言ごあいさつ申し上げます。

この6年間、理念や組織の整備を進め、活動の強化に努めてまいりました。組織面では、平成25年7月1日付で社団法人から公益社団法人に移行し、また支部制度を作って、九州支部、北海道・東北支部を立ち上げ、さらに毎年京都で開催されるSTS(The Science and Technology in Society)フォーラムには、それまでサイエンス系アカデミー、日本ですと学術会議に相当するアカデミーの会議しかなかったのを、新たに工学アカデミーの会議を設立するなど一定の成果は上がったと思います。

また、活動面でも実績が上がっております。時宜を得た講演会やサロンなどが数多く開催されましたし、国際活動も米、英、独、オーストラリア、アジアなど、焦点を絞って軌道に乗りつつあります。さまざまなプロジェクトも動きを活発化し、例えば「インフラのメンテナンスマネジメントシステムの構築」についての提言などは特筆に値するものかと思います。

こうした組織的整備、活動の活発化はまさに理事、会員、事務局の皆様のご尽力の賜物であり、衷心より御礼申し上げます。

一方で、多くの課題が解決途上にあります。最大の持越し課題は、財務の改善でしょう。財務の改善には、法人会員数と、企業に在籍する会員数の増加と、企業会員の実質的参加の拡充が鍵となると思われます。

工学アカデミーは、本来、産業界と学会の双方が参加して作り上げたものです。しかし、徐々に両者の協力体制が弱体化しつつあり、企業会員の数も活動への貢献も低下しつつあります。大学人ばかりで運営するのでは、アカデミーの存在理由はなくなるでしょう。現在は企業人の参加が減り、それが活力を低下させ、ますます企業人にとって参加する意味が薄れるという悪循環に陥っております。この負のスパイラルを逆に回すことが、活動強化そして財務強化につながるのではないのでしょうか。

社会や産業の転換期にある今こそ、産学それに官や市民も加えた幅広い連携が必要なのです。欧米主要国の工学アカデミーは、同様の困難を抱えながらも、様々なやり方で乗り越えているように見受けられます。米国はプロジェクトを受注し間接経費で財務を回しているようですし、ドイツは産業界が強力に支援しています。そもそも、個人会費が財務の中核を占めるアカデミーは私の知る限りありません。この状況を何とか克服したいものです。ここ半年あまり、努めてきました企業の参加強化の努力は緒に就いたばかりです。ぜひ、新しい執行体制のもとで結実させていただきたいと思います。

すでに本誌でなんども触れましたように、工学の重要性に異論の余地はありません。本アカデミーが課題先進国日本を課題解決先進国としプラチナ社会を実現すること、すなわち engineer the future を夢見つつ、新執行部の強力なリーダーシップを期待しつつ、御礼のあいさつとさせていただきます。



安全知と安全学委員会幹事 吉村 健志／KENJI YOSHIMURA

安全知と安全学委員会は、これまで10年にわたり、各領域における安全問題を取り上げて安全知の体系化を図る目的で安全工学フォーラムを主催してきた。節目となる今年は、本来の安全知の体系化に加えて、安全の学問の確立とその教育という基本に戻って議論するとともに、その教育のためのカリキュラムについて討議していくことにした。

2016年3月1日(火)、第11回安全工学フォーラムは、「ものづくりの安全学教育」をテーマとして、東京大学工学部11号館講堂に於いて約50名の参加者を集めて開催された。本フォーラムでは3名の講師をお招きし、大学における安全教育の現状と、実社会における安全の認証制度について紹介した。また、1名のパネリストを加えてパネルディスカッションによる審議、議論をおこなった。

まず、安全知と安全学委員会の向殿政男委員長は、どの安全の分野にも共通する安全の考え方や手法等を体系化する新しい学問としての安全学を紹介した。安全学とは、「安全の理念」のもとに「技術、人間、組織」の三側面から安全を総合的に体系化するもので、誰もが共通に知っていなければならない「安全の基本」を中心とする学問である。

次に、長岡技術科学大学大学院システム安全専攻・平尾裕司教授は、長岡技術科学大学における安全教育と人材育成について紹介した。長岡技術科学大学では、工学的知識を持った上で、組織経営、国内外の安全規格・法規に関する体系的な知識と実務能力及び安全技術の総合的なマネジメントのスキルを持つ人材を育成するとともに、システム安全専攻修了生の生涯教育として、システム安全エンジニア(SSE)資格制度の確立に取り組んでいる。

最後に、日本認証株式会社・栃尾昌洋氏が、既に10,000名の資格者を有するセーフティアセッサ資格を例に取り、国際的に通用する安全の妥当性判断を持った人材育成を目的とした教育／資格制度について紹介した。

パネルディスカッションでは、以上の講師に加えて、関西大学社会安全学部・安部誠治教授が登壇し、関西大学で策定中のテキストについて紹介した。パネルディスカッションでは、フロアを含めた参加者のうちほぼ全員が議論に参加するほど盛況であり、討議を通して、安全の教育が抱える課題は共通していること、できるだけ早期に安全学のカリキュラムを明らかにするのが望ましいこと等で一致した。

今後も引き続き安全工学フォーラムを開催し、広い観点から安全知の体系化と安全に関する共通の学問である安全学のあり方とその教育内容について論議していく予定である。



左から向殿政男委員長、安部誠治氏、
平尾裕司会員、栃尾昌洋氏



原子力一事故からの再生プロジェクトリーダー 山脇 道夫／*MICHIO YAMAWAKI*

本談話サロンは、「原子力一事故からの再生」プロジェクト（以下、「プロジェクト」と記す）が企画し開催する談話サロンシリーズの第3回目であり、平成28年3月22日（火）午後、東京大学山上会館で開催された。参加人数は会員外を含めて約70名であり、会場は参加者の関心の高さを反映して常に熱気に包まれていた。プロジェクトが開催してきたシリーズ第1回の談話サロンでは、福島第一原発で「何が起こったのか、そしてそれを踏まえた安全対策の現状は—」について、二人の講師からの講演とそれに続いて議論が行われた。第2回の談話サロンでは、3.11大震災・津波に耐えた東北電力女川原発の現場からの報告と、それに続いて議論が行われた。

司会は、プロジェクトリーダーの山脇道夫会員により行われ、冒頭同リーダーから、開催趣旨について説明がなされた。福島事故から5年が経過し、原発再稼働も緒についたにも拘わらず、我が国原子力の将来が明瞭には見極められない状況であり、また原発再稼働等にかかる原子力安全規制の在り方への疑問が聞かれるような現状を踏まえて、3件の講演を企画したことが述べられた。現在原子力委員会委員で元国連事務次長（軍縮担当）であられた阿部信泰氏からは、「我が国原子力の将来」と題して、続いてプロジェクト活動の中間報告として2件の講演—「福島事故の総括 その経過、原因及び対策」を奈良林直北海道大学教授から、また「原子力安全規制の現状と課題」を諸葛宗男元東京大学特任教授から、それぞれ講演いただいた。

阿部原子力委員の講演では、①世代を超えた長期的展望と、②安全性向上のための自主的改善を促す手立て、が取り上げられた。①では、原子力の将来には不確定要素があるが、原子力利用の技術的・人的基盤を温存するのが prudent な選択であり、高速炉技術についても同様であると主張された。②では、原子力規制委員会を強化しても、自主的安全性向上を促すことが必要であり、そのためピアプレッシャーの活用とか、内部からの提案を促すための内部告発者保護制度や内部からの指摘への褒章制度などの設置とか、原子力損害賠償保険の料率に安全性評価を反映させるとかの手法が有効であると主張された。

奈良林教授の講演では、福島事故の経過、原因について、最近解明された事項を含めて、総括的な報告があり、重大なメディア報道の誤りがいくつか指摘された。事故後の安全性向上対策実施状況について説明され、再稼働に向けての歩みが紹介された。プロジェクトで検討しまとめられている原子力安全を図るための提言（案）6項目が提示され、解説された。



山脇道夫リーダー



阿部信泰氏



奈良林直会員



諸葛宗男氏



澤田隆氏



諸葛元特任教授からは、プロジェクトでの議論をまとめる形で、具体的な改善策として、まず安全のフィロソフィーを明示すべきこと、安全目標と深層防護について明示すべきこと、原子力規制委員会の構造を改善すべきこと（規制委員会と規制庁を緊張関係に置くべきであり、また規制委員会を監査する委員会を設置するべきである）などについて、提唱された。

最後に、日本工学会事務局長の澤田隆氏から、全体の総括が行われて、閉幕となった。

以上の各講演の後、会場から多くの質問・コメントが寄せられ、講演者との間で活発な議論が展開された。発言には、我が国原子力の現状を心配されるとともに、将来に向けての重要なエネルギー源として期待したいという熱い気持ちが溢れていると感じられた。プロジェクトの更なる活動への期待を感じさせられた談話サロンであった。



北海道・東北支部米沢講演会および意見交換会

北海道・東北支部理事 安齋 浩一／*KOICHI ANZAI*

北海道・東北支部主催の講演会が、平成 28 年 4 月 21 日(木)15 時より山形大学工学部 100 周年記念会館 1 階セミナールームを会場として開催された。参加者は約 20 名。大場好弘支部理事（山形大学理事・副学長）の司会で、阿部博之副会長および小山清人支部理事（山形大学学長）による挨拶の後、次の 2 件の講演があった。

まず、山形大学工学部副学部長の落合文吾教授による「山形大学のリーディング大学院における教育の現状と工学部における男女共同参画への取り組み」と題した講演があった。平成 24 年にオンリーワン型として採用されたリーディング大学院「フロンティア有機材料システム創成フレックス大学院」プログラムは 5 年一貫教育の大学院であり、2 年目に QE(Qualifying Exam.)を実施する。研究能力を担保するために国際会議での発表・論文投稿の各 1 件以上が修了要件、また学生による自己評価シートを外部評価委員会の産学連携教授が評価する等、基礎研究・応用開発・事業化までを有している山形大学の特長を生かした取り組みである。また、JST 事業として採択された、米沢栄養大学、大日本印刷(株)と山形大学が共同で取り組んでいる平成 27 年度ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(連携型)「有機エレクトロニクスを活用した未来の生活創造への女性研究者の参画」事業の紹介があった。

引き続き、山形大学・古川英光教授による「3D ゲルプリンターによる材料×機械の新工学創成と社会実装」と題した講演があった。現在普及が進んでいる 3D プリンター技術の現状についての紹介の後、講演者らが開発した高強度ゲルを成形材料とした独自の 3D プリンター技術の紹介があった。また、同技術の普及を目指した地域での活動（米沢いただきます研究会、ひらめきときめきサイエンス）や海外（バングラデシュ）での普及活動や高強度ゲル材料のビジネス化の取り組みについて紹介があった。

講演会終了後、山形大学工学部 100 周年記念会館内「Cafe 吾妻」に移動し、飯塚博支部理事（山形大学工学部長）の司会で、落合、古川両講師を囲んでの意見交換会を実施した。



大場好弘支部理事



阿部博之副会長



小山清人支部理事



落合文吾氏



古川英光氏

玖野 峰也／*MINEYA KUNO*長井 寿／*KOTOBU NAGAI*金谷 一朗／*ICHIROH KANAYA*

EAJの企画・運営委員会では若手の参画とリンクさせ、アンカンファレンスの取り組みを強めている。従来のTED（Technology, Entertainment, Design）の手法に飽き足らず、予め仕込みをしないアンカンファレンスが、急速な広がりを見せている。

EAJでは特にSTEAM（Science, Technology, Engineering, Arts and Mathematics）を3項ずつに分け、Engineering + Arts + Mathematicsを「美しさとは何か」

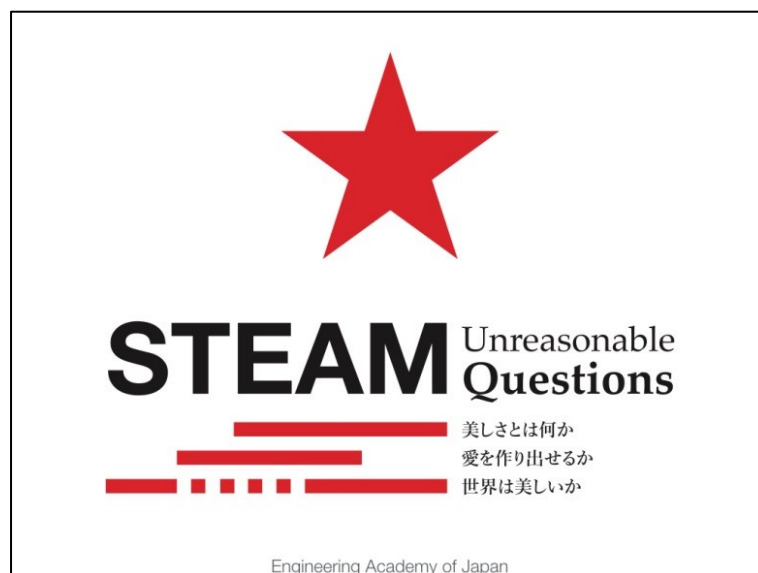
と、Technology + Engineering + Artsを「愛を作り出せるか」と、Arts + Mathematics + Scienceを「世界は美しいか」とそれぞれ読み替えて、3回のアンカンファレンスを開催したいと考えている。この3回のアンカンファレンスの後には、STEAM全体を論じるアンカンファレンスを総纏めとして開催したい。

このコミュニケーション科学としてのアンカンファレンスの取り組みと並行して、一方では従来のボトムアップではなくトップダウン的に取り上げるプロジェクト群（新コアプロジェクトと命名）を選択したい。これらはEngineeringの重要分野をカバーする4つの領域をなす。

即ち材料、基盤工学、バイオ・医療、ロボット・AIの4領域とコミュニケーション科学を加えた5つの新コアプロジェクトを創設し、EAJの課題に取り組んで行きたい。

米英独中国が今若手の育成に舵を切った。思えば学振第149委員会で全米工学アカデミー（NAE）が日本から学んだのは「日本の初等中等教育」であった。この日本の冠たる教育システムを受け継ぎつ

つ、さらに有効な高等教育・社会人教育に繋げて、日本に役立つ優秀な技術者群を育てて行く必要がある。温故知新を含め、新しいチャレンジとして新コアプロジェクトを進めて行きたい。



新コアプロジェクト統括：長井寿常務理事 + PO			
テーマ	PO	リーダー	課題
材 料	担当理事選任	加藤隆史	化石資源から脱却できるのか
基盤工学	担当理事選任	塚原健一 谷口栄一	持続的メンテナンスはできるのか
バイオ・医療	担当理事選任	片岡一則	高度医療を誰でも享受できるか
ロボット・AI	担当理事選任	舘 暉	労働はなくなるか
コミュニケーション科学	担当理事選任	金谷一朗	情報の壁は取り払えるのか

新入正会員のご紹介

(2016年2月入会者)

[第1分野]

おおの のぶただ
大野 信忠



名古屋大学大学院工学研究科教授

1950 年愛知県生まれ。1979 年工学博士（名古屋大学）。豊橋技術科学大学助手、講師、助教授、名古屋大学助教授、教授を経て 1997 年より現職。日本機械学会副会長等を歴任。専門は固体力学、計算力学。特に非弾性材料モデルと均質化法を研究。

かわもと ようじ
川本 要次



三菱重工業(株)執行役員・総合研究所長

1955 年兵庫県生まれ。1979 年東京大学大学院修士課程修了。同年三菱重工業(株)入社。2008 年同社長崎研究所長、2014 年同社執行役員フェロー、日本機械学会理事。2015 年 4 月より現職。専門は構造力学。船舶、原子力機器等の構造設計指針の策定に従事。

[第2分野]

ありかわ せつお
有川 節夫



九州大学名誉教授

1941 年現在の韓国、大邱生まれ。専門は情報学、特に情報検索、機械学習、発見科学、人工知能における論理と推論。1985 年九州大学教授、以降、附属図書館長、副学長、理事・副学長等を経て、2008 年九州大学総長。2014 年九州大学名誉教授。

[第3分野]

いはら まなぶ
伊原 学



東京工業大学大学院理工学研究科(化学工学専攻)教授

1965 年埼玉県生まれ。1994 年東京大学大学院工学系研究科化学工学専攻博士課程修了(博士(工学))。東京大学助手、東北大学助手、東京工業大学准教授(化学専攻)を経て 2015 年より現職。2012 年フランス国立応用科学院リヨン校(リヨン大学)客員教授を兼任。2013 年化学工学会エネルギー部会部会長。2015 年環境エネルギー機構副機構長。2016 年学長補佐。専門は燃料電池、太陽電池の基礎研究・デバイス研究およびエネルギーシステム研究。

こてら たかひろ
小寺 隆博



住友化学(株)工業化技術研究所グループマネージャー

1962 年大阪府生まれ。1990 年京都大学大学院工学研究科化学工学専攻修士課程修了。同年住友化学株式会社入社。プロセス研究所。1998 年本社勤務住化ファインケム株式会社出向企画室副参事。2001 年住友化学生産技術センター。2003 年同チームリーダー。2009 年より現職。

たかい まどか
高井 まどか



東京大学教授

株式会社東芝で半導体部門の研究開発。早稲田大学大学院理工学研究科博士課程で、電気化学法による軟磁性材料の研究。1998 年博士（工学）を取得後、電子技術総合研究所にて太陽電池材料開発。2001 年東京大学に赴任、2011 年より現職。現在は医療用材料の研究開発。

[第4分野]

はなき けいすけ
花木 啓祐



東京大学教授

1952 年神戸市生まれ。1980 年東京大学工学系研究科博士課程修了、工学博士。東北大学土木工学科助手を経て、1983 年東京大学都市工学科助教授、1993 年東京大学先端科学技術研究センター教授、1998 年同工学系・都市工学専攻教授。2014 年 10 月から日本学術会議副会長。専門は都市環境工学。

ふくし けんすけ
福士 謙介



東京大学国際高等研究所サステナビリティ学連携研究機構教授

東北大学卒業、同大学大学院修士課程修了、米ユタ大学大学院博士課程修了。土木環境工学が専門。2005 年からサステナビリティ学の創設に関わり、様々な社会と自然の持続可能性にかかわる研究に携わる。国際連合大学サステナビリティ高等研究所の客員教授も務める。

みずたに のりみ
水谷 法美



名古屋大学大学院工学研究科(社会基盤工学専攻)教授

1960 年三重県生まれ。1989 年工学博士（名古屋大学）。1988 年名古屋大学助手、1991 年同大助教授、2002 年より同大大学院教授。2011・12 年工学研究科副研究科長、2014 年より同大学高等教育研究センター長。専門は海岸工学。

みやいけ よしひと
宮池 克人



中日本高速道路(株)代表取締役社長 CEO

私は、40 年以上にわたり電力土木技術者として、原子力発電所などの計画から建設に至る業務に携わって参りました。後年は経営陣の一人として電気事業全般に携わって参りました。現在は中日本高速道路株式会社で、お客様に安心してご利用頂ける高速道路の提供に携わっております。

やまぐち ひろき
山口 宏樹



埼玉大学学長

1952 年埼玉県生まれ。1975 年埼玉大学卒業。1980 年東京大学大学院博士課程修了。東京大学講師、埼玉大学教授等を経て、同工学部長、理工学研究科長、理事・副学長（研究・国際担当）を歴任。2014 年 4 月より現職。専門は土木工学、特に橋を主とした構造動力学。

【第5分野】

こうもと みつあき
河本 光明



住友化学(株)気候変動対応担当部長

1961 年広島県生まれ。1984 年京都大学工学部化学工学科卒業。同年通商産業省入省。2012 年製品評価技術基盤機構理事。2015 年より現職。工学アカデミー会員として、気候変動問題への貢献を多少なりともできればと考えております。

たけうち かずひこ
武内 和彦



東京大学国際高等研究所サステイナビリティ学連携研究機構長・教授

1951 年和歌山県生まれ。1976 年東京大学大学院修士課程修了。1980 年農学博士。東京大学アジア生物資源環境研究センター教授等を経て、1997 年より同大学院農学生命科学研究科教授。2012 年より同サステイナビリティ学連携研究機構長・教授。2008 年より 2016 年 6 月まで国連大学（上級）副学長を兼務。専門は緑地環境学、サステイナビリティ学。

INFORMATION

山本 賢三会員

2016 年 2 月 23 日逝去 101 歳

名古屋大学名誉教授

元日本原子力研究所副理事長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1937 年 3 月 東京大学工学部電気工学科卒業
1937 年 4 月 富士通(株)入社
1940 年 7 月 名古屋大学工学部助教授
1952 年 1 月 同 教授（1969 年 4 月 工学部長）
1971 年 4 月 同 退官（名誉教授）
日本原子力研究所理事
1978 年 6 月 日本原子力研究所副理事長
1980 年 9 月 日本原子力産業会議常任相談役
1987 年 4 月 EAJ 入会

斎藤 正男会員

2016 年 3 月 7 日逝去 82 歳

東京大学名誉教授

東京電機大学名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1962 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了
1962 年 4 月 同 工学部講師
1963 年 4 月 同 工学部助教授
1974 年 3 月 同 医学部教授
1992 年 11 月 EAJ 入会
1994 年 4 月 東京大学退官（名誉教授）
東京電機大学工学部教授
2004 年 3 月 東京電機大学名誉教授

2016年度(平成28年度)会費払込のお願い

5月31日の定時社員総会において2015年度収支決算の決議と2016年度収支予算の報告が行われましたので、今年度の正会員および賛助会員の会費について間もなく請求書をお送りさせていただきます。お払い込みのほどよろしくお願い申し上げます。

なお正会員については終身会員制も選んでいただけますので、ご希望の会員は事務局にご一報ください。事務局から改めて計算書と終身会費請求書をお送りさせていただきますので、必ずその後に終身会費を払い込みください。終身会員制について、詳しくは以下のURLをご参照ください。

<http://www.eaj.or.jp/whatseaj/naiki002.pdf>

日本工学アカデミーの徽章を作製しました

EAJのロゴをあしらった徽章を作製し総会当日に販売しましたところ、たいへんご好評をいただきました。ご希望の会員には2,000円(送料込み)でお分けしますので、事務局までご連絡ください。なお、終身会員には無償でお渡しいたします。



- ◆サイズ・色：13mm・金色
- ◆素材：銅合金
- ◆アタッチメント：国産タイタック
(プラケース入り)

顕彰・叙勲

2016年春の叙勲・褒章受章者が発表されました。その栄に浴された会員に、心よりお祝い申し上げます。

事務局夏季休業のお知らせ

来る8月11日(木)から16日(火)まで、事務局夏季休業といたしますので、よろしくお願い申し上げます。

編集後記

人工知能のAlphaGoが世界最強のプロ棋士を圧倒した。IoT(モノのインターネット)やAI(人工知能)に代表されるように、技術の世界の変化があわただしい。医療などの分野に大きな影響を与えた生命科学の発展が生命倫理を必要としたように、IoTやAIなどの技術革新が社会や人間に及ぼす影響について、利用やビジネスの観点からのみでなく、技術倫理の観点からも深い議論と実践が必要である。しかし、工学・技術の分野では、このような動きが見られない。モノを作ることこそ工学者や技術者の神髄であるとの意識がまだ強いためであろうが、ただモノを黙々と作るのみの工学者・技術者からの脱却が求められている。その意味でも、我が日本工学アカデミーの存在意義が問われているように思われるが、如何であろうか。

末筆ですが、熊本地震で被災された本会会員の皆様に心からお見舞い申し上げます。

(専務理事 池田駿介)



公益社団法人
日本工学アカデミー編集会議